特集「日中関係の井戸を掘った人々」第3回

大倉喜八郎のアジア観と中国事業

東京経済大学名誉教授　村上勝彦

まずお断りしておかねばならないことは、「大倉喜八郎のアジア観・中国観」について、私は十分にはお話できないということです。大倉は、自分は「口舌の徒」ではなく「実行の徒」である、政治などに関わらず実業一筋で行くのだと常日頃言っていましたが、自分で体系的に書いた本はなく、4～5冊の口述書が残されているだけで、日記もありません。そのため体系だった考えを知ることはできません。もっとも時々の感想は1万首以上に及ぶと言われる狂歌に記されておりますが。

大倉の生まれが天保時代であったことは重要です。日本の封建体制は天保時代に、内憂外患による動揺が始まっており、青年時代は幕末維新の激動期、それを好機とする可能性が生み出された時期でした。事実、大実業家である古河市兵衛・岩崎弥太郎・安田善次郎・藤田伝三郎・森村市左衛門・渋沢栄一などはすべて天保生まれです。古河、岩崎は大倉より数年先輩で、その他の人は数年後輩に当たります。井上馨・伊藤博文などの政治家も天保生まれで、これら実業家と政治家は同世代ゆえに上下意識が比較的少ない関係でした。

大倉は数え92歳まで生きたという大変な長寿で、かつ非常に元気だったので、他の人よりも2倍近く長く活動できたと言えます。事実、大倉が始めた中国関係の事業は、66歳頃から活発になりました。89歳の時には3か月ほど蒙古・満州・中国・朝鮮旅行をしており、その翌年には、自分所有の山林内にある南アルプスの赤石岳の頂上まで登り、さらに翌々年、亡くなる前年には朝鮮の金剛山に登るという元気さでした。

彼が一代で作りあげた大倉財閥は、三井・三菱・住友・安田に次ぐ規模でしたが、投資先があまりにも大陸へ傾斜していたためと、銀行を作ることを嫌ったため、戦後の財閥解体後には企業グループとして再建できませんでした。また強力な三井・三菱などと対抗するために、ベンチャー精神をもって朝鮮・中国などに積極的に向ったと言えます。これらの点で、大倉にとってアジア、中国は重大な意味がありました。

欧米、アジアとの関わり

30歳の大倉

90歳ごろの大倉

本論に入ります。やや意外かも知れませんが、まず大倉が銃砲商であったことの意義についてです。

大倉は18歳で単身、江戸に出て鰹節屋の丁稚奉公をし、2、3年後に独立してごく小さな乾物屋を開き、さらに10年ほど後に銃砲商に転職しました。30歳頃からわずか5年ほどにしか過ぎませんが、この時期は重要だと思います。このことから「死の商人」として大倉を捉えようとする見方もあります。

しかし私は銃砲商であることによって、欧米社会と身近に接し、アジアをめぐる国際政治・経済状況を肌で感じることができたのだと考えます。当時、銃砲の入手先は開港場の外国商人であり、売込み先は諸藩であり、その銃砲師範などが相手です。銃砲師範は洋学に造詣が深く、開明的で国際情勢に明るい人物です。銃砲という商品の国際性、政治情勢との関わり、そして関係者のあり方から、大倉の欧米およびアジアに対する認識が形成されて行ったものと思われます。

大倉の欧米社会との出会いは極めて早く、またアジア社会との出会いはどの実業家よりも早いものでした。銃砲商時代の認識に加えて、欧米に直接行くことにより、欧米社会の二面を知ることができました。

1つは、欧米の近代的な経済システムの優れた面であり、日本人はそれを徹底的に学び、日本に導入すべしとしました。もう1つは、欧米諸国のアジアへの政治的侵略、経済的進出に警戒すべしという考えです。明治5年に日本の民間人として初めての長期欧米視察旅行、その10年ほど後に2回目の欧米視察を行い、帰国後に『貿易意見書』という口述書を刊行しています。その中で、欧風の商法を導入し、日本の商業者は世界を知るべきであると言う一方、欧州諸国はアジア植民地化をどんどん進めており、東洋経済の占有を企図し、ちょっと難しい表現ですが、「あたかも衆鷹が一禽を争うが如し」と述べています。

他方、大倉のアジア社会との出会いは、欧米から帰国した翌年、明治7年の台湾出兵時に軍の用達業務で台湾に渡っており、その2年後の朝鮮開港の時には、対馬の人を除けば誰よりも早く朝鮮に渡り、自ら商売を行い、さらに釜山に商品陳列展を開催するように日本政府に提言し、明治10年にそれを開かせています。

また、明治13年には大倉組のナンバー2である横山孫一郎に、外務省の役人に従ってトルコ・ペルシャに行かせ、日本との貿易の可能性をさぐっています。さらに数年後、大倉組は日本茶の輸出業務と関連して、紅茶を世界に輸出しているインドへの茶箱の輸出を始めています。このように大倉は、台湾・朝鮮・トルコ・ペルシャ・インドと、東、西、南アジアとの貿易に努めました。

日本におけるアジア主義の源流、原点とされるのが、明治13年に結成された興亜会です。大倉は創立時からの会員であり、議員という名の役職に就いています。役職者はすべて選挙で選ぶという、当時にあって珍しく民主的な組織ですが、正・

副会長と実務を扱う幹事の他に議員という役職があり、最初の人事で、大倉は最多票を得て議員に選出されました。

アジア主義というのは、戦前日本の重要な思想的潮流ですが、その内容は人や時期によって様々です。初期のアジア主義は、欧米に対抗してアジア諸国の団結と提携を図り、アジアの振興、ひいては欧米との対等化をめざすという内容で、興亜会はこの初期のアジア主義のものです。

会員は東京本部と、神戸・大阪・福岡の分会、日本人のほかに中国・朝鮮・トルコ・ペルシャ人も含めて、最大４００名ほどになります。アジア諸国間の、とくに日本・中国・朝鮮の３国間のコミュニケーション、つまり人と物の交流、言葉の通じ合いと交易・貿易を重視しています。大倉はこのアジア間の貿易の発展にもっとも関わり、日本・中国による共同経営、つまり合弁事業に努めた人物でした。

大倉と中国革命との関わりと言うとやや大げさかも知れませんが、幾つかの断片的事実を繋ぎ合わせて考えてみます。布引丸事件、中国同盟会結成、辛亥革命の３つです。

布引丸事件とは、フィリピンの革命家と交流があった孫文が、明治32年にフィリピン革命を支援すべく、日本からフィリピンへ武器を送ろうとした事件です。孫文の要請で宮崎滔天、犬養毅らが大倉組から武器を購入し、布引丸に積み込んで出航しましたが、途中で沈没した事件です。大倉自身が武器購入の目的をどれほど関知していたかは分かりません。

次に明治38年８月20日、孫文ら80余名の在日革命家が東京で中国同盟会成立大会を開きました。この革命組織が６年後の辛亥革命を準備したのですが、実はその成立大会は東京赤坂の大倉邸内で開催されたのです。

そして今から３年前の辛亥革命１００周年の時に、革命１００周年と中国同盟会成立を記念して講演会が結成日と同じ８月20日に開かれましたが、会場は大倉邸の跡地にあたるホテルオークラでした。

６年後に辛亥革命が勃発しましたが、孫文・黄興ら革命派の最大の弱点は資金と武器の不足でした。欧米及び日本政府は革命派を支援せず、革命派は結局、日本の実業家に頼る他ありませんでしたが、その中で実現したのは大倉組の３００万円と三井物産の30万円だけでした。

革命派が江蘇省を掌握した直後、黄興から大倉組上海支店に江蘇省鉄道を担保として借款供与の要請がありました。借款供与には日本政府の了解が必要であり、また自分だけではなく多くの実業家、銀行家などで応じるべきだと大倉は考え、皆が集まっている席で話しました。

しかし時の外務大臣内田康哉は遅疑して態度を明確にせず、日銀総裁の高橋是清は「冒険的だ」と言って反対し、実業家、銀行家も賛同しなかったので、大倉は憤然として席を立ち、自分一人の責任で借款を供与したのでした。

この借款３００万円のうち２５０万円が南京臨時政府に渡され、そのうちの大部分が大倉組供給の武器の支払いに当てられたようです。大倉は商売をしているように見えますが、借款の利率は大倉が銀行から借入れた２００万円の借入利率と同率なので利鞘はなく、何よりも貸金が返済されるかどうか、武器支払代金が回収できるかどうかたいへん危ぶまれるので、大倉は大きなリスクを負って自己責任で行ったということになります。しかし担保の江蘇省鉄道は英国の勢力範囲の揚子江流域にあるため、借款締結に英米両国は抗議し、英国資金で早急に大倉に返済されたという経緯があります。

その後、孫文が来日したとき、２度にわたって大倉に会いに来ており、また大倉の喜寿に際し、祝いの書を大倉に贈っております。孫文は大倉にたいへん感謝

していたことと思われます。

親善は提携と通商

これまでの中国との関わりで、周辺事情は少し分かりましたが、大倉自身の考え方、具体的発言はよく分かりませんでした。しかし明治後半からの積極的な中国事業の展開を経た大正期に、興味深い発言が残されています。

第1次大戦中の大正6年、大倉は「日本では一般に中国を不安・危険な国とみる傾向があるが、第一革命、つまり辛亥革命は時代精神の能動的反映で、新文明の威力が旧制度・旧文明を破壊し、その翌年の第二革命は旧文明を打破する文明力の基礎が薄弱で失敗した」とかなり抽象的な表現ですが、中国革命を新文明と言っています。そして、「日中親善を具体化するのは経済的提携と通商であり、今後も自分は巨万の対中投資を行う」と言いきっています。事実、大々的な対中国投資を行い、大倉財閥は大陸に傾斜してゆきます。

その5年後、「日本のこれまでの対中国政策は中国人の誤解を招いているので、一新すべきだ」と興味深い発言をしています。大倉が86歳のときです。さらに翌年は、引退を予告していた米寿の前年にあたりますが、大倉は引退後の抱負として、「日中が仲違いするようでは日中両国の独立は共に危うい。親善、経済的同盟によって共存共栄すべきだ。中国関係事業の経営の完成まで自分は死ぬまで努力する」と言って、引退後も中国事業には携わる、中国事業では引退しないと言います。

そして米寿の年、大正13年に、これまで抱いていた中国事業に対する考えを改めて述べます。「大倉組のこれまで数十年来の対中投資は、あたかも底なしの甕（かめ）に水を入れるようである。事業は立派なので人を得れば成功するのだが、人材が乏しい中国での人材育成に協力する。日中両国はいかなる障害があっても経済的結合の宿命にある。大倉組の事業収益は日本国内では1割も得られるが、対中国投資では2～3分に過ぎず、元金の回収が覚束ないものもある。このような事業上の絶大な危険を冒して投資するのは、中国人が日中の経済的不可分性を自覚するまでの犠牲と覚悟している」という内容です。

では大倉は経済活動を担う人材の育成になにをなしたか。60歳の還暦記念に1つ、70歳の古稀記念に2つの商業学校を創設しました。大倉が2回目の欧米視察で痛感したのは、近代的商法を身につけ、海外で欧米商人と互角に渡り合える商人、現在の経済人士を育成する必要性でした。それが欧米視察から十数年後に商業学校として結実します。

明治33年に開校したのが大倉商業学校、今の東京経済大学の前身校です。その7年後、大阪に大阪大倉商業学校、朝鮮ソウルに善隣商業学校を創設しました。昭和15年までの卒業生の数字では、善隣商業学校は朝鮮人が45％、1800人余です。戦前の朝鮮では近代的学校、商業学校が少なかったため、朝鮮経済界で大活躍した卒業生が多く、私が創立百周年記念式典に招かれたときには、当時の金大中政権の通産大臣をはじめ、銀行界の大長老連など、多くの卒業生に紹介されました。今でも大阪とソウルの学校は存続しています。

大倉の中国事業の背景には、幅広い人的ネットワークを見落とせません。中国への度重なる訪問によって作られたもので、大倉の海外渡航は大きくいうと、欧米からアジアへと変わっていき、とくに明治30年代後半からは満洲・中国と朝鮮だけになります。結局、生涯に欧米へは3回、台湾を含めた朝鮮・満州・中国の

アジアへは13回と圧倒的に多くなります。

中国の場合、交流相手の分野は、政治家・軍人・実業家・学者・芸術家などと幅広く、政治家・軍人は、政治的に右から左、地域的に北から南まで、互いに対立し戦争している相互の諸党派に及んでいます。大倉の喜寿に際しては、孫文のほか、袁世凱、その2代後の大総統である徐世昌などから祝いの書を貰い、米寿のときは、84名の人士が祝福する文章の発起人に名を連ねています。たとえば、北からは満州政権の張作霖、北洋政権の徐世昌・段祺瑞、南方政権の汪兆名・張継・廖仲愷ら国民党人士などです。その4年後の死去の際は、国民党の蒋介石や西北軍閥の馮玉祥なども加わっています。京劇の華と謳われた梅蘭芳には、北京で観劇して感激し、歌を贈り、それが機縁で日本に公演で2回招き、それには芥川龍之介などが見につめかけました。

大倉組は、日本で最初にロンドン支店を設けたように、朝鮮では明治9年に釜山出張所、中国では明治16年に上海出張所を設けて、アジア貿易を展開しています。

ところで資本輸出には、資金を貸与する間接投資と、現地経営に関わる直接投資、つまり事業投資の2種類がありますが、大倉はとりわけ直接投資を重視し、その中でも相手側と組む合弁投資を重視しました。

日本初の対中国投資は借款供与という間接投資ですが、それは明治36年の大倉組による漢陽製鉄所への借款でした。少し後れて三井物産も同製鉄所に借款を供与します。合弁では、明治40年に瀋陽の中国人の商業会議所にあたる商務会と一緒に瀋陽馬車鉄道会社を作っていますが、何よりも本渓湖に作った製鉄所、本渓湖煤鉄公司が大規模で、歴史意義の大きなものです。

財閥と中国

第1次大戦期の日本の各財閥の中国事業を比較しますと、貿易額では圧倒的に三井物産が多く、古河・大倉・三菱の13〜20倍です。しかし直接投資額では大倉が僅かの差でトップ、三井がそれに続き、三菱・安田は大倉、三井の3分の1から1割余りにしか過ぎません。そのほぼ15年後の事業投資額では、増え方は三井が7倍、大倉が3倍なので、三井が大倉を2倍以上上回っており、後にこの差は広がっていきます。しかし三菱・住友は、三井・大倉の比ではありません。1923年と1930年の借款投資、つまり間接投資を見ると、やはり三井・大倉の順で、三菱・住友はとるに足る金額ではありません。つまり、第1次大戦期、1923年、1930年の3時期を比較すると、当初トップだった大倉を三井が上回るようになり、その差が開いていきますが、やはり大倉・三井の比重の大きさは変わらないと言えます。

大倉と張作霖

1928年で見ると、直接投資と言ってよい株式投資は約1600万円、借款投資が2300万円、計4000万円です。この頃の大倉の国内投資を含めた全投資額は約1億円なので、4割が中国向けでした。

大倉死去後には、とくに本渓湖煤鉄公司の設備増強投資で対中国投資額はどんどん増大していき、敗戦前には対外投資が7〜8割にまでなり、敗戦で総てなく

なりゼロになりました。冒頭に述べた財閥解体後に企業グループとして再建できなかった大きな理由の一つがここにあります。

１９２８年の対中国投資の収益率を見ると、稼動中の資本では３・２％、そうでない回収困難な資本が約１１００万円あり、それを含めると、全投下資本に対しわずか２・26％にしか過ぎません。この収益率と回収困難な資本の存在は、先ほど述べた大倉の１９２４年頃の発言内容である、「利益は国内で１割だが、対中国投資では２～３分である、元金回収も覚束ない」というのとまさにピッタリ合っています。

大倉は、中国においてとくに実業振興を強調した事業家との関係が強いように思われます。日本の八幡製鉄所よりも古く、アジアで最初の近代的製鉄所である漢陽製鉄所の経営者、盛宣懐や、実業振興を唱えて民間紡績業の代表的な担い手となった張謇などとの関係は深く、彼らへの借款供与が見られます。

第１次大戦期には有名な西原借款がありますが、これと最も対立したのが大倉の鳳凰山鉄鉱山開発、製鉄所設立計画でした。西原借款は政府間の資金供与によって日中提携を図るものでしたが、膨大な資金は結局、北洋政権の政治・軍事費として使われ焦げ付いてしまいました。政府間のこれを表街道とすれば、大倉は民間同士で行おうとしたもので、裏街道だとした研究者もいます。ここにも大倉の民間主導的な経済提携の性格が見られます。

本渓湖製鉄所火入れ式

大倉の対中国投資をめぐっては、興味深い多くのエピソードが残されています。たとえば大倉最大の対中国投資である本渓湖煤鉄公司については、その成立は大倉喜八郎の独断専行ともいうべきもので、息子の喜七郎や大倉組副頭取の門野重九郎は、危険だからと連合戦線を組んで猛反対したと言われます。確かに当時の満洲の資源の状況は不確かであり、また製鉄業は、当時は「鉄と味噌汁にはあたらない」、つまり鉄では儲からない、味噌汁を飲んでもあたらない、腹をこわさない、と言われていたほどだからです。そのとき山県有朋が国家的事業だから援助しようと申し出たところ、大倉は、見込みがあるからやろうとしているのだと、その申し出を断わり、山県は、「大倉はさすが天秤棒の出身だけあって、士魂商才だ」と感心しました。

この製鉄所は現在、本渓鋼鉄公司という名で立派に続いており、中国において大きな役割を果たしています。

また興味深いものに蒙古での水田開発があります。出来た米を日本に運んで、将来の日本の食糧難に備えようと大倉が構想したものです。関東大震災の年、内蒙古の奈曼王と契約して、華興公司という名の合弁農場を作り、延べ90万円を投資し、６０００町歩の水田から18万石の水稲を作る計画でした。それほど大規模には発展しませんでしたが、関東大震災の翌年の正月、日本に送られてきた収穫米で正月を祝い、大倉は、得意の狂歌で、「あたらしき蒙古の米によねの年　古き翁をいはふ正月」と詠んでいます。

大倉喜八郎の思想・事業観・趣味

最後に、大倉の思想・事業観・趣味などを紹介したい。大倉の最大の特徴は、そのベンチャー精神であり、何よりも「オンリーワン」「日本初」が好きで、ある事業の成功に満足することなく、次から次へと新規事業に挑戦したあくなき企業家精神にあります。それを端的に表すのが、大倉の造語と思われる「進一層」という言葉です。これは困難に突き当たったとき、一歩退いて考えるのではなく、突破しようと前に進み、うまくいっているときは決して休まず突き進むべしということです。

大倉はこうした実践主義を少年時代に陽明学の丹羽伯弘から学んだと言っており、大倉の出身地の新発田市では、ベンチャースピリットに富んだ先輩から学ぶべく、十数年前に「大倉喜八郎の会」が作られ、現在も活発に活動しております。

大倉は小さな乾物屋を開いていたとき、いろいろな本から訓話になるようなものを集め、24歳のときに一冊の本にしています。その題名は『心学先哲叢集』。心学とは江戸中期の商人出身の思想家、石田梅岩を祖とする思想のことで、石門心学といいます。石門心学の最大の特徴は、町人を基盤とし、倫理・道徳にかなった商いによる利益は正当だとする考えで、武士道にも匹敵する商人道を唱えたことです。大倉は青年時代、「商人はいかにあるべきか」ということを考え、『心学先哲叢集』を纏めたものと思われます。

大倉は自分を実業家だと言い、虚業は嫌いと言います。では虚業とは何か、投機、賭けなどがそうだといい、西洋ではそれらは虚業とみなされていると西洋風を評価します。だから株式や土地の投機を嫌い、第1次大戦時に所有株式が大暴騰した時に、部下の「売却したら」という献言に対し、自分はその事業に賛同したから株式を持っているのだと取り合いませんでした。

他方で大倉は、自分は事業家であり、銀行者ではないと言って、決して銀行業に手を染めようとはしませんでした。もちろん銀行の重要性は認めており、決して虚業だとは思っておらず、大倉も必要なときには銀行から融資をしてもらいます。しかし彼は、預かった金を貸して利鞘を得るような業務は自分には向いていない、いつ預金取り付けにあうか分からないような心配はしたくない、それよりも商機をつかみ、大胆に事業展開をしたい、「男らしい仕事、お国に役立つような仕事がやりたい」と言っています。

最後に大倉の趣味とそれに関連した性格についてです。大倉は事業と趣味を画然と分けており、赤坂の本邸では事業、向島の別邸では趣味に没入していました。多趣味でしたが、とくに五七五七七の狂歌を詠むこと、三百年前頃に始まった浄瑠璃の一種の一中節を謡うこと、大倉が60歳頃から熱心に手習いを始めた本阿弥光悦の光悦流の書を書くこと、そして現在の大倉集古館となる美術品の収集などが主な趣味です。13、14歳ころから狂歌の師匠について狂歌を詠み、郷里から江戸に投稿して江戸の狂歌本に掲載されるほど狂歌歴は古く、狂歌の研究者は、大倉は本来は狂歌師であり、後に富豪になったのだ、とまで言っています。生涯で1万首以上作ったと言われています。

（2月7日・フォーラム）

講師略歴　**（むらかみ　かつひこ）**
1942年　東京都生まれ
東京大学経済学部卒業
1974年　東京経済大学専任講師
同教授
2000年　同大学学長
2008年　同大学理事長
著書　『大倉財閥の研究』など

公開講演会記録

特集「日中関係の井戸を掘った人々」第1回

財界人村田省蔵の中国・アジア観

評論家・元金融機関勤務　半澤健市

戦後初期に日中友好の井戸を掘った財界人村田省蔵についてお話しいたします。

先ず村田省蔵とは何者であったのか。その生涯は企業経営者、政治家兼外交官、A級戦犯容疑者、そして再び財界人という波乱の人生でした。その経歴に沿って村田の人生を述べて、「財界人村田省蔵の中国・アジア観」が浮かび出るようにしたいと思います。

昭和16年12月8日

ここで皆さんに昭和16（1941）年12月8日にタイムスリップして頂きたい。太平洋戦争開戦の報を村田は長江河畔の船上で聞きました。2カ月前まで第3次近衛内閣の逓信大臣兼鉄道大臣だったのが、無冠の財界人となった村田は2カ月にわたる中国一周の視察旅行の途上にありました。開戦時に日本人全員が一種の解放感または恍惚感に襲われたことは歴史が示す通りであります。村田の回想はその時の気持ちをこう記しております。

「私はそこで考えました。いよいよ伸るか反るか、英米を敵にまわし、開戦となった以上なんとしても勝たなければならない。それには挙国一致して結束邁進するよりほかない。われわれもそのために何かお役にたたねばならない。目的はともかく、この際ゆうゆうとして旅行を試みるべきではない。帰国して待機の姿勢をとるべきであると考えまして、直ちに東京に引き返しました。（「中国と私」『エコノミスト』毎日新聞社、5609・22・1956年9月22日・以下も同様）

帰国した村田を待っていたのは東条英機首相でした。近衛文麿の第2次・第3次内閣で陸軍大臣として閣議で村田と同席していた東条はこう要請します。

「満州事変ではすべて軍人の判断によってことが行われた。大東亜戦争はその失敗を繰り返さないために、軍司令官に親任官1人をつけて、その専断に陥らないようにしたい。……村田君、英米のごとき強国を向こうにまわして戦っている私は非常な大責任を負っている。この自分に対して従来のよしみによって協力の意味でこの仕事を引きうけてもらいたい」（「村田省蔵自叙伝」）

すなわちフィリピン派遣軍（第14方面軍）軍政最高顧問への就任要請でした。

これを承知した村田がマニラに赴任したのは42年2月です。マニラは同年1月2日には本間雅晴中将の率いる14軍によって占領されていましたが、米比連合軍はマニラ湾を囲むバターン半島の洋上コレヒドール島要塞で頑強な抵抗を続け、その占領は5月になりました。

本間が戦犯としてマニラで処刑される原因となった「バターン死の行進」はこの時の出来事です。米比軍の司令官ダグラス・マッカーサーは「アイ・シャル・リターン（私は必ず還ってくる）」と叫んで3月にオーストラリアへ脱出しました。日本軍の軍政は42年早々に始まりますが、それを受け入れたフィリピンの政治、経済はどうであったのか。

村田省蔵

政治は「フィリピン・コモンウェルス（独立準備政府）」といって大統領マニエル・ケソンを指導者とし一院制議会をもつ政体であり、米国は46年に独立を承認することを約束しておりました。「米英の邪悪なる植民地支配からアジアを解放する大東亜共栄圏」という日本の思想と行動は、フィリピン人にとっては不要かつ迷惑な事態でした。

経済は1次産品の麻、椰子油、タバコ、砂糖、バナナ、鉱業品を輸出し、工業品、消費財を輸入する、主に米国を相手国とする「モノカルチュア（単一栽培経済）」でありました。

日本軍による軍政は現地の指導者を介して実施されました。逃亡したケソン大統領らは米国に亡命政府をつくります。フィリピンに残留し日本に協力した指導者は本来の忠誠心はケソン政府におき、やむなく対日協力をしているという論理でした。

日本軍政は失敗でした。経済は貿易相手国たる米国を失ったのでモノが売れない、モノが買えない。物資の過剰と不足が発生する。その上、兵站戦略のない日本軍による物資、住宅、食料の強奪や、いたずらな暴力の行使が行われました。これに対してフィリピン大衆はゲリラ組織によって日本軍に執拗に抵抗しました。それにまた日本軍が報復を繰り返すという悪の連鎖が始まりました。

ラウレルが見た大東亜共栄圏

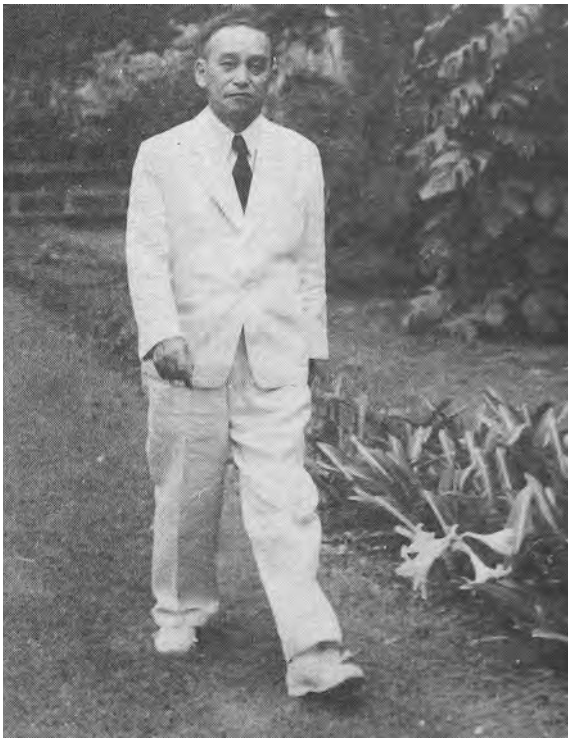
次の対話は日本へ脱出する途上、台湾で足止めを食ったラウレル（日本軍政下の大統領）と村田が日本占領への批判と反省を率直に語り合う場面です。村田が日記に書き残したものです。

「（ラウレル）率直に云ひ日本は比島人の心理をつかむに失敗せり。比島民衆は此3年間、初めて多数の日本人と接触して残忍なる民族との観念を懐くに至れり。……予（ラウレル）の如き日本を知り日本を理解するものにとりては此事象を戦時中の一現象と見るも、日本は何故に児玉総督が台湾を統治せし方式に則り、力に依らずして比島民衆に臨ませざりしか、之が日本の失敗なりと断ずる所以なり。……併し予としては失望せず。1度蒔かれたる大東亜共栄圏建設の理念は何時かは必ず其萌芽のもえ出る期あるべく、仮令1人になるとも生命のあらん限り、之が実現に協力せん。……予（村田）曰く、日本は1億国民の結束に付ては成功しをり

しも、東亜10億の民衆に対する施策に対して欠くる所あるは説かるゝ所の如し。日本としては之を行ふ以前に於て米国の圧迫極度に達し、止むなく立ちて窮鼠の手段に訴へたるを以て用意の周到ならざりしは遺憾なり」（「村田日記」４５０３０１、以下年月日のみは「村田日記」）

フィリピン人の対日抵抗についても村田は次のように記録しています。ここの「匪賊」とは抗日ゲリラ活動のことです。

「知るべし軍は過去3年に亘り所在に匪賊の討伐をなすも何等の成績挙らず、其間敵米国の比島に対する画策到らざるものなく、匪賊は益々其勢力を増大し、1度敵（米軍）の反攻成るや匪賊も民衆も翕然として之を迎ふ。大統領の所謂『民衆にとりては救世主の再来とも見へたるなるべし』の語必ずしも誇張の言にあらず。此現象に対しては如何に陳弁せんとするも事実は事実として認めざる可らず」（「村田日記」の別冊「比島施策批判」）



フィリピン時代の村田省蔵

太平洋戦争は42年6月のミッドウェー海戦を画期とし、43年のガダルカナル戦の敗北（「転進」）あたりから日本軍は劣勢に転じました。ただマッカーサーが「アイ・シャル・リターン」と言ったフィリピンへの反攻は意外に遅くて44年8月になります。9月のマニラ空襲では日本大使館も爆撃されました。10月にはレイテ沖海戦で戦艦武蔵が撃沈され、連合艦隊の主力は壊滅的な打撃を受けました。航空機が爆装して敵艦に体当たりする航空特別攻撃（特攻）が開始されたのはこの時からです。村田は神風特攻を知ってこう書いています。

「若鷲蓮の間には今回白鉢巻隊なるもの出来、戦闘機に爆弾を抱えて体当たりをやるものにて、之を募集せるに1万の若人我も我もと応募を申出たりと、真に涙の出る咄なり、（略）これ日本独特の戦法なるべし、偉なる哉、惨なる哉」（４４１０２６）

大使館が攻撃されて危険は村田自身の身辺に迫ります。米軍に空爆されたマニラ湾を見てこう書いています。墓場に突き刺さった商船の中には大阪商船社長としての村田が進水式に立ち会ったものも含まれていたでしょう。

「昨今アメリカの新聞雑誌にはマニラ湾を日本艦船の墓場と題し其写真を掲げ居るとのことにつきその実際を見たきためなり。其惨憺たる光景を一目し、無残なる当日惨状を聴き今更の如く茫然たり。予は海岸の邸を去りても、常に艦船並に港湾施設の安全に不尠（すくなからず）関心を持ち居りしため、空爆ある毎に此方面への注意を怠らず、其被害状況に付ても常に探究に勤め居りしが、斯く迄徹底してやられたとの報告に接せず。モヤありて遠望き

かざりしもホテルの海に面する地点を中心として大小艦船30数隻不様な形をして傾斜し、横転し、又沈没しをれり。其内には3本煙突の巡洋艦あり、嘗ては太平洋にて快速を誇りし優秀貨物船金華丸あり」（44120４）

村田は様々なルートから敗北確実の戦況と抗日闘争の激しさを知るなかで、理念としての「大東亜戦争」と現実としての「大東亜戦争」のギャップの大きさを肌で感ずることになります。シンガポール陥落の英雄、山下奉文（ともゆき）が14軍の司令官として着任したのは44年10月でしたが勝負は既についていました。軍司令部、日本大使館、ラウレル政府はマニラを脱出しルソン島北部のバギオへ退却し、更に北へと敗走します。

村田と実質亡命のラウレルは命からがら帰国します。ラウレルを奈良に置いたあと村田は敗戦までの2カ月を国内の指導者層と精力的に面談を続けます。それは留守中の国内事情聴取、フィリピン戦場の悲惨な実態、終戦工作の模索でした。昭和天皇をはじめ、政治家、軍人、官僚、財界人のトップ数十人との接触で、国内で彼が見たのは方向感覚と判断能力を失い相互に責任転嫁を図るパワーエリートの姿でした。自らの占領体験を参考にして被占領の構図をどう構想するか。これが敗戦直前の村田を捉えていた心理であるように思われます。しかし村田は9月にA級戦犯容疑者として捕らえられます。近衛内閣の閣僚であったことがその理由であったと考えられます。ここから巣鴨プリズンの2年間が始まります。

笹川・村田の日記にみる巣鴨プリズンの世俗

巣鴨プリズンの住人を3種類に分けてみます。

第1は平和に対する罪に問われたA級戦犯の被告です。東条英機ほか28名の被告は独房に収容されていました。第2はA級戦犯容疑者で100名以上。第3はBC級戦犯被告とすでに判決のあった受刑者です。主に前線で戦った兵士たちです。平均人数は数百名でピークでは180名おりました。このように被告、容疑者、受刑者が混在していました。

複数房では、かつての最高指導者と前線の兵士が戦争の実態を語り合う機会が生まれました。村田は前線、修羅場の現実をここでも聞くことになります。収監者には世俗に徹する者と超俗を志向する者とがいました。たとえば食事の多少という世俗的なことが問題になる。同じA級戦犯容疑者として巣鴨にいた笹川良一は日記に次のように書いています。

「飯盛が少い。残飯にするとて喧しい。皆食ひたいが発言が厭である。人の念仏で極楽参りしやうと云う人達ばかり。常に苦言の呈すのは予一人。皆の為に」（笹川良一『巣鴨日記』460206）、「高橋三吉大将をはじめ老人連中は風呂の中で石鹸を顔一ぱいに付けて髭を剃り、剃った髭を風呂の中で洗ひ甚しきに至っては褌の洗濯までなす。自分さえよければ他人の迷惑の如き目中にない。これが敗戦第1の原因と知った。（略）人間は裸にして見ねば善悪は判らぬ。獄は善悪を試験するには第1の場所である」（『巣鴨日記』460425）

世俗的気分も超俗的精神も同じ人間の中にあります。超俗的というのも、死への恐怖を宗教により克己するという方向もあれば、「あの戦争は何だったのか」という社会的な目で問題を考える方向もあります。村田にも色々な面がありますが、ここでは彼の「戦争犯罪」、「戦犯裁判」への態度を軸として考察することにします。それは「大東亜戦争」の総括と

も言えます。「理念としての大東亜戦争」と「現実としての大東亜戦争」をどう考えたかと言い換えてもよいでしょう。理念としての大東亜戦争に村田は最後まで固執していました。大東亜共栄圏の理念に疑いを持っていませんでした。獄中で日米弁護士と交わした会話を日記にこう書いています。そこでは満州国すら「永久の傀儡」ではないと言っています。

戦犯裁判に関し―満州国永久の傀儡にあらず

「予は宇佐見に対し弁護士側口述の際又は其他の好機を捉へ是非日本の立場を堂々と述べ事今日に至りたるは止むを得ざるに出でたるものにして遠因する所少なからずとして日本に対する第1次欧州戦争以後の米国の態度より説き起し、極東の和平を樹立するための満州国建国の要を述べ支那の表裏常なき外交を指摘し満州政府必ずしも永久の傀儡にあらざる旨を事実の上に証し今日迄の法廷に於ける好戦的侵略を使命とせる如き誤断に対し一大反駁を試みられん事を熱望していると云い、ファーネス（米弁護士）に対しては我等と共に此処にある6百の若者に対する米国の軍事裁判は公正を名とせる勝者の裁判なり…裁判関係者の深き考慮を煩す旨を力説す、両人之を諒とす、尚宇佐見は其内弁護人側より言はるる如き口述を為す事になりおれりと（461003）

何故に戦敗国のみをさばくか

また東京裁判が勝者による裁きである点も指摘してこう言っています。

「戦争其ものを将来絶滅せんがために戦争に関し行はれし非行を厳罰に処せんとするなれば何故に戦敗国のみをさばくか、戦勝国の行為にして国際法に反し或は人道又は平和に背くものあらば均しく罰すべきものにあらざるか、偶々自国兵の非行を罰せる処刑を如此薄弱なる理由にて減刑するが如き態度は更に我等をして其標榜せる正義人道を疑はしむ」（460602）

ラウレルとの会話でも認めていましたが、村田は「現実」としての大東亜戦争が残酷非情なものであったことをより深く認識していきます。彼は巣鴨で同室となったBC級戦犯被告から現実を聞きましたが、さらに大きな経験はマニラにおける獄中体験でした。

というのは本間雅晴がマニラで戦犯裁判を受けており、村田は46年の1月から2月にかけて、本間の弁護側証人要員として巣鴨から再びマニラに移送されたのです。その間に、彼はマニラ法廷の被告、日本人の通訳、裁判関係者らから戦場の真実を詳細に聞いて記録しています。そこには日本軍の残虐行為や軍内部の混乱、矛盾する戦闘命令などが詳細に記載されていますが、ごく一部を次に引用します。

12歳の小児を刺し殺したるがごとき事実

「彼等（日本兵）は彼等が是なりと信じたる行動に出でたるは事実にて唯軍事上必要以上の程度に出たることに対しては非難に値す、一、二の例を挙ぐればバタンガスの1部落に於ては村民を1カ所に欺き誘導して予め仕掛置きたるダイナマイトにて一挙に鏖殺（おうさつ）（皆殺し）せしが如き12歳の小児を刺し殺したるがごとき事実あり、斯る行為は徒らに出たるものにあらず其環境と当時の事情を考察するの要あり、同時に敗戦の際の将兵の行動は冷静なる平時的判断や勝者の立場より律すべきものにあらざるを知らざる可らず、一言にして言へば彼等は理性を失へるものとも言い得べし」（460214）

其悲惨なる言語に絶す

「（同室者村山らの戦中経験談から得た印象は）戦争末期に於ける我将兵の暴状想像以上に凶悪なることなり、マニラの東方山中に立てこもりし部隊の如きは木

の葉草の根昆虫類を食い尽し人肉まで喰いしもの相当あり、而も味方の同僚を殺し、靴其他の当用所持品を奪い其肉をくろう、既にいずれも骨と皮のみとなりおることて単に股の内側の如き部分に限られ道々見る路傍に三々五々斃れ居る死体は胴より上のみなり其悲惨なる言語に絶す、（略）又一例としてバギオの附近のある金山の隧道の内に傷病兵数千を収容し居りしが転進の際其入口を外より閉鎖したるが如き惨劇所在に行はれ戦死と共に斯くして比島にありし約40万の兵其30万を喪へり。（略）（米軍は適時の判断で降伏するのに比べ）我方に於ては将校たる職業軍人が国民の義務としての大義に基き国防の任に当れる兵に対し其犠牲に関心を持たず之を消耗品視せること単に父兄に申訳なきのみならず人道上許す可らざるの大罪たるべし云々、斯くまでとは想像せざりし予は余りの醜悪なる獣性の曝露に対し均しく日本人として同胞として羞恥の念に堪えざるものあり」、「参謀及幹部将校の多くは敗戦思想を夙に有し玉砕は避くべしと云いながら矛盾にも部下に対しては最後まで死守せよとの命令一点張りにて何等計画的指示を与へず後退の時は率先して身の安全を図る等曾ては帝国軍人として其勇武を誇りし彼等の行動の如何にも解するに苦しむものあり」（４６０２２１）

村田省蔵はフィリピンでの自身の体験に加えて巣鴨獄中の見聞からも戦争の実相を詳しく知りその意味を深く考えるようになります。その結論は最後に申しあげます。47年に70歳で巣鴨から釈放されますが、46年に指定された公職追放が解除されたのは51年であり大阪商船の相談役として財界に復帰した時は74歳になっていました。78歳の他界までの最晩年の活動は５年間に過ぎません。

中国への目覚め

その間の大きな仕事は対比賠償交渉の特命全権大使と日中貿易再開の端緒を開いたことでした。賠償交渉は村田で完結せず後に高碕達之助が調印することになります。日中問題に話を絞りますと、村田は53年に「日華経済協会」会長を河田烈副会長に譲ります。この組織は40年に村田自身が作った「長江産業貿易開発協会」の後身で、戦後は台湾政府との窓口として機能していました。ここで村田は商売の相手を本土中国へと転換したわけです。朝鮮戦争開戦から３年、休戦の53年は東西冷戦の最中です。大胆な転換というべきです。彼自身は「転向」をこう回想しています。

「しかし私はそのうちに内省しはじめたのです。中共が少数の共産党員により指導せられているとしても、６億の民衆がわずか数年のうちに、性格が一変するような民衆になれるかどうか。一体、革命の際には血をみることはいずれの国、いずれの時代においても歴史の示すとおりであって、そういう状態が長く続くものではありません。（略）私はこの際、毛沢東であろうが、蒋介石であろうが、問うところではない。われわれは日本として６億の民衆との友好を深め、広大な中国との接近をはかるべきだと思ったのです」（「村田省蔵自叙伝」）

数字万能の今日、村田の掘った井戸の価値は軽視されがちです。そこで私は４年間の３つの成果を論じようと思います。

第１は、日本国際貿易促進協会（「国貿促」）の設立。

第２は、訪中と周恩来との会談。

第３は、商品見本市の日中相互での開催、です。

日中友好団体は沢山できましたが、国貿促は日中貿易の中心的な窓口となりました。55年１月に訪中した村田は周恩来首相と長時間の会談を行いました。現役

を退いていたとはいえ、戦後初めて周恩来に会った大物財界人は村田省蔵です。

彼は大別して3点を言いました。

1つは、「日本国民の中にある疑い」を代弁するという言い方で、中ソ共産党が日本共産党を道具にして革命を輸出しているのではないかということ。2つは、それに対抗するために日本は必要上日米協調路線でゆくということ。しかし3つ目に周恩来の唱える平和共存路線を支持すると明言した上、中国は本土と台湾が統一した上での国連加盟に賛成すると、発言しました。

この年の国内外の情勢は、といえば、米中が直接対決した朝鮮戦争の休戦は僅か2年前のことです。前年に周・ネルー会談で平和共存政策が合意されています。その精神を受けたバンドン会議が4月に行われます。国内では社会党の統一、自由民主党の結成による「55年体制」が秋にスタートします。この情勢下での村田発言は、現実的でありつつ将来展望をもった積極的なものだったと思います。村田の回想による会談の1部を引用します。

村田「日本国民の中にある疑いを率直に披露しました。本日のお話で疑惑をもっている人に話ができると思う。（略）戦時中軍事には関係しなかったが、戦前には政府の一員であったので贖罪の気持をもっている。若い頃から中国に来て、中国には深き愛着を持っているので現在の日中関係を坐視するに忍びず、日本国際貿易促進協会を設立して貴国との経済関係の緊密を願っている。私は何も怖れるものはない。アジア人とアジア人とを戦わしめるというのが米国の政策なら反対します。原水爆反対については、私は発起人の1人である。（略）米国の対中国政策で、日中関係が掣肘されることは日本として迷惑千万である」

周「本日のお話は率直であったので誠に痛快である。この態度に敬服する。村田先生と共に相互共通の利害関係問題を見出し得た事は有意義であった。（略）一夕の話で解決しようとするのは非現実的である。村田先生が再び来られるなら歓迎する」（半澤健市『財界人の戦争認識―村田省蔵の大東亜戦争』）

この会談が翌年の両国見本市へと繋がります。

周・村田会談

北京の日本商品展覧会

1956年10月6日、北京「日本商品展覧会」（商品見本市）は開会しました。124万人が入場しました。上海は12月に行われ、168万人が入場しました。村田は「日本国際貿易促進協会会長」兼「北京日本商品展覧会総裁」として北京

見本市に主役として参加しました。

会場正面には「日本商品展覧会」の文字と両国国旗（サイズは縦3メートル半、横5メートル）が掲示されており、日中友好を示すスローガン、日本風絵画による装飾などを見て村田は感激します。私は、この日章旗は戦後初めて北京の空に掲示されたものではないかと思います。

1956年10月6日、北京・日本商品展開幕式で挨拶

開会前に予告なしに毛沢東が会場へ現れ、村田と宿谷栄一が案内します。あと団長室で約30分間会話をしました。毛は「見本市は日中友好に寄与する。日本の技術に学ばねばならない」、「日本との和平は欲するが、困難は承知しているから急ぐことはない。アメリカ帝国主義は困るが人民は別であること。いずれ米国も判るときがくる」などと話しています。

毛からは「天皇と鳩山首相に宜しく」との発言もありました。村田は「現在自分は一国民に過ぎず天皇とは直接会う機会がないから伝言はできない」、しかし「鳩山首相へは伝える、首相からも主席に面談の節は宜しくとの伝言があった」と答えました。午後3時から開幕式があり両者の挨拶や祝電披露がありました。

8日には、午後4時に周恩来が来館し会場を丁寧に回り7時前まで観覧しています。このとき村田は胃ガンに冒されていました。亡くなったのは翌年3月であります。北京見本市では日本の技術者が主導して中国初のテレビ中継が行われました。

（半澤前掲書）

村田の中国・アジア観をどうみるか

結論を急ぎます。村田の中国・アジア観はどういうものであったか。村田は中国をよく見ていました。青年社員として10年間、過ごした上海租界の公園には「犬と中国人、入るべからず」と書いた表示があったそうですが、村田も回想にそのことを書いています。彼は中国とアメリカと日本で過酷な国際競争を経験しました。その後、大東亜戦争下のフィリ

北京・日本商品展会場で毛沢東主席を案内

ピンで「大東亜共栄圏」の理想と現実のギャップを知りました。

学会の論文は「易しいことを難しく書く」習慣がありますので、私は博士論文に次のように書きました。「村田はインペリアル・ブルジョアジーから平和を求めるブルジョアジーへと転換した」。「インペリアル」の意味は、「天皇の臣下としての」と「帝国主義的な」と２つの意味があります。

「平和を求めるブルジョアジー」とはなにか。それは相手を侵略の対象として見る視線から対等なパートナーとして見る視線をもつようになったブルジョアジーのことであります。彼は長く厳しい戦争体験を通して精神の転換を達成したのです。それは実に大きな犠牲を伴ったのですが。

訪中した年の豪雨の中の国慶節パレードを天安門楼上から観たときの感動を記しています。青年社員村田が10年間見ていた半植民地中国の晴れ姿を彼はどんな気持で観たか。

しかし皆さんはこう問うかも知れません。

日本の財界人は１９４５年８月15日を境にして全員が「平和を求めるブルジョアジー」に変身したのではないか、と。なるほど形の上ではそう言えるかも知れません。しかし戦争から平和への転換には深刻な懊悩や葛藤を伴う筈です。私は村田省蔵の「回心」が真に内面の変化を伴ったものと指摘したいのです。

日本経済新聞に「私の履歴書」というコラムがあります。私はその財界人編の数十編を読みました。管見の限り村田のような内面の葛藤と変化を吐露した人は１人もいませんでした。それどころか「大東亜戦争」について真剣に言及したものすら少なかったのです。

（２０１３年11月８日・フォーラム）

講師略歴（はんざわ　けんいち）

１９３５年　東京都生まれ
１９５８年　一ツ橋大学社会学部卒業
　　野村証券、東洋信託銀行
　　などに勤務
２００６年　神奈川大学大学院歴史民
　　俗資料学研究科
　　博士後期課程修了
　　歴史民俗資料学博士

著書　『「財界人の戦争認識―村田省蔵の大東亜戦争』

（本号掲載写真は同書より転載）

国際交流委からのお願い

ヤンゴン外語大に日本の本を送ろう

１月号の根本敬教授の講演でも述べられていたように、ビルマ（ミャンマー）と日本は長い交流の歴史がありましたが、１９８０年代末に同国が軍政下に入ってからはそれも途絶えがちになりました。

しかし、２０１１年の民政移管以降、再び経済界を中心に交流が復活しつつあります。大江哲会員は12年夏、同国を訪問し、かの地で没した旧日本兵を慰霊されました。この旅行については、本誌同年11月号に報告を寄稿しておられます。

その後、大江さんは新しい日本語の図書が乏しいヤンゴン外国語大学の日本語科に個人で図書を送っておられます。協会ではこのほど氏の活動に協力することになりました。

つきましては、会員の皆様に本の寄贈、ならびに図書購入費、輸送費にあてる１口１０００円のカンパをお願いしたいのです。

書籍のジャンルは日本の社会と文化の理解に役立つ歴史や文学、テレビドラマ関連、年中行事など日本の風俗紹介、少年少女向け漫画などが、とりあえず適当かと考えます。

本の寄贈、問い合わせは、協会事務局あるいは村田嘉明国際交流委員（ＴＥＬ０９０・３０４２・１６９３）へお願いします。

特集「日中関係の井戸を掘った人々」第2回

石橋湛山の中国認識・中国論について

山梨平和ミュージアム―石橋湛山記念館―理事長　浅川　保

２０１２年は日中国交回復40年、13年は日中平和友好条約締結35年の記念すべき年でしたが、ご承知のように、日中関係は、戦後かつてなかったような危機的状況です。こういう時こそ日中関係の歴史、日中友好に大きな役割を果たした人物とその思想に学ぶ必要があるかと思います。その意味で、本日、日中友好に大きな足跡を遺した石橋湛山（１８８４～１９７３年）について、話をさせて頂く機会を得まして大変嬉しく思います。

石橋湛山と私

私は、大学で日本近代史を勉強しましたので、石橋湛山については、もちろん知っていました。しかし、湛山について本格的に勉強を始めたのは、今から二十数年前、１９８６年からです。１９８６年10月、当時、私が教員として勤務していた湛山の母校、山梨県立甲府第一高校の資料室で、湛山が中学時代に書いた文章を発見しました。彼が中学生時代の１９００年から１９０２年の『校友会雑誌』に書いた、「石田三成論」「湛山随筆」など７つの文章です。

その１つ、中学４年、16歳の湛山が書いた「石田三成論」の中で、彼は三成を「世人が想像せる如く、軽薄なる一個の小人にてはあらずして、…（略）一個の好丈夫にてありし、彼の人物は家康と詰抗するに足るべきもの」と高く評価しています。その理由として、「彼は最後の大事に敗れたり。然れども成敗と是非とは判然別事に属せり。成敗は当時の形勢によりて別れ、是非は後人の公説によりて定まる」（拙著『偉大な言論人 石橋湛山』所収）と、戦の勝ち負けでなく、後世の公平な評価によって人物を評価すべし、としています。

また、１９０１年、中学５年、17歳の時に書いた「湛山随筆」では、当年亡くなった中江兆民に触れて「中江兆民も、とうとう一年半の寿命となった、気骨のある、面白い、当代には得難い人物であるが、惜しい事だ。其生前の遺稿として出版した一年有半と言うのを読んで見たが、相変わらず、気焔万丈である、とても余命一年半、棺桶の中へ片足突込んでる人間の言う事とは思はれない」（同上書より）と兆民を高く評価しています。

中学時代の石橋（右）

成敗でなく是非を重視して人物を評価すべしとしたこと、自由民権思想家・兆民を高く評価したことなど、中学生離れした湛山の鋭い、批判的精神に満ちた文章に驚き、以後、『石橋湛山全集』（東洋経済新報社）全15巻を購入し、第1巻から読み始めました。

『全集』には、湛山が東洋経済新報社の記者として、文筆活動に入った明治末年から、政治家として活躍した戦後・昭和40年代までの文章が収められていますが、多くが『東洋経済新報』に書かれた評論・論説で、日本近現代史のそれぞれの時期に、政治・経済の諸事件、例えば、第1次世界大戦、ロシア革命、ワシントン会議、金解禁、満州事変等に対して、言論人・湛山がどう考えていたのかが具体的にわかる興味深い内容です。それらを読み進む中で、民権・平和・自由主義を貫いた湛山の言論の偉大さ、先見の明を痛感しました。

２００７年5月、８００人を超える個人・団体のカンパ・浄財で民立民営の山梨平和ミュージアム―石橋湛山記念館―が、甲府市朝気に開館、設立準備会事務局長だった私が、その理事長に就任しました。

平和ミュージアムは、1階に、甲府空襲の実相、甲府連隊の歴史、戦時下の暮らしなど戦争関係の展示を、2階には、石橋湛山の生涯と思想を展示しています。県内はもちろん、全国から見学者が訪れ、開館以来6年余、この11月に累計入館者が1万人を超えました。

展示だけでなく、全国唯一の石橋湛山記念館として、この間、2年に1度、計3回の石橋湛山シンポジウムを開催してきました。２００７年の第1回、開館記念シンポジウム「いま、石橋湛山に学ぶもの」は、岡山大学教授の姜克實氏と東洋経済新報社社友の山口正氏、それに、小生を講師として開かれました。

中国出身で、湛山研究の第一人者、姜克實氏が「湛山思想の真価」と題して基調講演を行いました。「日本の近代化、経済成長はアジアの後進の国々にとって手本となる成功であったが、それは同時にアジアに対する侵略・植民地化の歴史であった。侵略によらない近代化の可能性があるか…（略）この難問に対する答案を示したのが湛山である」と姜氏は指摘。湛山の思想が持つもっとも重要な意義として、「領土狭小、資源貧乏、人口過多という『持たざる国』命題への回答で、日本を生かす平和の道を見出したことにあり、アジアの国々にとっても参考になる」と強調、そして、湛山を「正しい国家、政治の在り方、人間の生き方を示した思想家として、思想史的価値が大きい」と高く、評価しました。

また、山口正氏は「湛山の思想は、東洋経済新報社の伝統の上に形成された。湛山の経済論は、単に社会を分析するだけでなく、分析した結果を社会の改造や人間生活の機能にプラスになる方向で絶えず考えられていた。その意味で湛山はプラグマティスト、経世家であった」と指摘しました。

２００９年の第2回シンポジウムは、京都大学名誉教授の松尾尊兊氏と東洋経済新報社元社長の神尾昭男氏を講師に、２０１１年の第3回目は、東洋英和女学

院大学教授の増田弘氏と山口正氏を講師にして行われ、いずれも盛況裡に終わりました。

石橋湛山の中国認識・中国論

本題の「石橋湛山の中国認識・中国論」に入ります。『東洋経済新報』の記者として本格的な言論活動を開始した大正デモクラシー期から、政治家として日中国交回復に尽力した1960年代までのほぼ半世紀にわたる石橋湛山の中国認識・中国論を、大正デモクラシー期、15年戦争期、戦後期の3つに分けてお話します。

●大正デモクラシー期（一九一一～三〇年）

1911年に東洋経済新報社に入り、言論人としてのスタートをきった湛山が、本格的な中国論を展開しだしたのは、第1次世界大戦（1914～18年）への日本の参戦が契機でした。時の大隈重信内閣は、日英同盟を口実にドイツに参戦、ドイツの根拠地・山東半島の青島を占領し、さらに中国の袁世凱政権に対して対華21か条要求を突きつけました。こうした政府の帝国主義的侵略政策に、当時の日本のジャーナリズムがほとんど同調姿勢を示した中で、これを手厳しく批判したのが、湛山でした。

『東洋経済新報』編集長時代の石橋

彼は『東洋経済新報』の社説で次々と政府の政策を批判する論陣を張りました。「青島は断じて領有すべからず」（1914年11月15日号『東洋経済新報』社説『全集』より、以下同）、「重ねて青島領有の不可を論ず」（1914年11月25日号）、「第2の露独たるなかれ」（1915年5月25日号）、「先ず功利主義者たれ」（1915年5月25日号）など。これらの中で湛山は、青島の領有を厳しく批判、戦争の愚にして無益なること、帝国主義政策による利権の拡大はもはや時勢にそぐわないこと、むしろ植民地を放棄して門戸開放と不干渉（民族自決）主義による経済的発展を主張しました。彼の思想の特徴ともいうべき、小日本主義の思想がほぼこの時期に現れています。

その中で、功利主義者、湛山の面目躍如の論説「先ず功利主義者たれ」の一節を紹介します。

「唯一の途は功利一点張りでいくことである。我れの利益を根本として一切を思慮し、計画することである。我れの利益を根本とせば、自然対手の利益も図らねばならぬことになる。…（略）吾輩は敢えて我が国民に言う。我等は曖昧の道徳家であってはならぬ。徹底した功利主義者でなければならぬ。然る時にここに初めてその親善が外国とも生じ、我れの利益はその中に図らるると」

1921年7月から翌年にかけて、アメリカ主導で主要国が参加するワシントン会議（太平洋会議）が開かれ、海軍軍縮問題や日米間の摩擦と並んで中国問題が論議されました。この国際会議の開催にあたって、湛山は7月以降、会議の開催直前まで、『東洋経済新報』の社説をほぼ毎号を執筆し、社内に「太平洋問題研究会」を設置して、会議に対する勧告文をまとめるなど、積極果敢な対応をしました。

その中の中国に関連した論説をあげま

すと、「一切を棄つるの覚悟」（1921年7月23日号）、「支那と提携して太平洋会議に臨むべし」（1921年7月30日号）、「大日本主義の幻想」（同年7月30日号、8月6日号、8月13日号）です。

これらの中で湛山は「日本はそれまでの大陸進出で得た満州・台湾・山東・朝鮮など一切のものを棄てる覚悟で会議に臨め」と主張、貿易の数字などをあげながら、満州や朝鮮の領有が日本経済にも人口問題の解決にも役立っていないことを指摘し、むしろ、「日本が率先して植民地・勢力範囲を解放して平和主義に徹することこそが、支那（中国）を始めとする弱小国の信頼を得て、彼らと提携して国際的位地を確立し、経済的にも大きな発展を遂げることができる」と主張しています。当時の国策ともいうべき大日本主義を根底から批判した、植民地放棄論―小日本主義です。

1919年5月4日に起こった五・四運動を契機として、1920年代には中国のナショナリズム運動、革命運動は大きな高揚期を迎えます。湛山は中国のナショナリズム運動、革命運動を日本の明治維新に匹敵する「新しき支那の生まる生みの苦しみ」ととらえ、中国の国民革命（北伐）の動きなどを積極的に肯定するとともに、田中義一内閣の行った山東出兵などの対支強硬外交を厳しく批判する論陣を張りました。

「支那は何うなる」（1923年6月23日号）、「中国共産党」（同年8月4日号）、「支那を侮るべからず」（1927年4月16日号）、「ああ遂に対支出兵」（同年6月4日号）、「対支強硬外交とは何ぞ―危険な満蒙独立論」（1928年12月1日号）などです。

●15年戦争期（一九三一～四五年）

1931年9月18日の柳条湖事件に始まる、いわゆる満州事変にあたって、日本のジャーナリズムは、軍部の行動にほぼ例外なしに挙国一致的な支持を与え、擁護論を展開しました。これに対して、東洋経済新報社の代表取締役として編集・経営の中心だった湛山は、「内閣の欲せざる事変の拡大」（1931年9月26日号）、「満蒙問題解決の根本的方針如何」（同年10月10日号）を相次いで執筆し、満州事変批判を展開しました。

その論旨は、内閣と軍部の分裂を指摘した上で軍部の行動を非難し、事変による満蒙問題の根本的な解決は困難である、とした上で、中国の統一国家建設の要求を真っ直ぐに認識することが、問題解決の方法であるとしました。

しかし、日本の中国侵略の拡大、言論弾圧の強化の中で湛山の主張（小日本主義）も後退、屈折を余儀なくされます。「満蒙新国家の成立と我が国民の対策」（1932年2月27日号）、「日支衝突の世界的意味」（同年3月5日号）など。それらの中で湛山は、新国家（満州国）の成立を「甚だ不自然の経過によって成立したもの」とし、国際的孤立化を余儀なくされた日本外交の活路を切り開く方途として、日英提携による中国の開発を積極的に唱えます。

1937年7月7日の盧溝橋事件に始まる日中全面戦争の開始からアジア太平洋戦争期、終戦にかけて、言論統制、弾圧がますます厳しくなる中（この時期『東洋経済新報』はしばしば削除、発売禁止の処分を受け、紙の減配を受けました）、湛山の『東洋経済新報』は、婉曲的な表現ながら、軍部独裁を批判、戦争の拡大に反対し、早期終結を要望し続けました。この時期の湛山の中国論としては、「譲るべきを譲って求むる所を明かにせよ」（1937年7月17日号）、「日清・日露両戦役の回顧と今次事変の経済」（1938年1月8日号）などがあります。

１９４０年５月から６月にかけて約１月半、湛山はダイヤモンド社の石山賢吉らとともに、朝鮮及び満州を旅行しました。初めての中国訪問で湛山は、ハルビン・本渓湖・奉天・撫順・弥栄と千振の開拓団などを精力的に視察し、翌年、その記録が『満鮮産業の印象』として出版されました。その中で湛山は「満州に土地無し」として、国策である満蒙開拓を暗に批判したり、満州には資源はあるがその開発は容易ではなく、むしろ満人の農業を盛んにすることが大事であることなどを主張しています。当時としては、極めて大胆、かつ貴重な論考と言えます。

●戦後期（一九四五～七三年）

１９４５年８月の終戦を、「更生日本の門出―前途は実に洋々たり」（１９４５年８月25日号社論）との心境で迎えた湛山は、自らの抱負を実現するために、政界に打って出ました。第１次吉田内閣の蔵相（１９４６～47年）、鳩山内閣の通産相（１９５４～56年）などを歴任、そして、１９５６年12月、自民党総裁選で、岸信介を破り、第55代首相になりましたが、病気のため、翌１９５７年２月、在任２か月で退陣しました。退陣後は、平和外交、特に、日中国交回復のために尽力しました。

石橋湛山内閣

第２次大戦後の中国では、国民党と共産党による内戦の結果、共産党が勝利し、１９４９年10月、中華人民共和国が成立しました。湛山はこうした中国の変化を、日本の明治維新と同じ国作りの運動として肯定的に評価しました（「中共の共産主義革命と日本の明治維新」１９６０年）。そして、彼の属していた保守党（自由党、のち自由民主党）が中国を敵視していた時期に、日中貿易の促進、日中国交回復を主張し続けました。短命に終わった石橋内閣がもう少し長続きしていたら、日中国交回復も早まっていただろうと思われる所以です。

さて、日中国交回復のために湛山が行ったことについて、１９５９年の第１次訪中を中心に少し詳しく述べたいと思います。

岸内閣の中国敵視政策によって冷却した日中関係の修復を図るため、湛山は１９５９年６月、周恩来首相に書簡を送り、訪中の意思を示しました。それが通じて、８月に周首相より正式な招待状が届き、９月７日、湛山は、３千人以上の見送りを受け、羽田空港を発ち、北京に着きました。空港で湛山が行ったスピーチの一部を紹介します。

「貴国の発展はアジアの発展であります。目のあたり、貴国の発展を見て慶賀にたえません。古来、偉大なる文化を築いた６億の中国民衆と、明治維新を契機としていち早くアジアに工業国を打ち立てた日本の１億の民とが、相提携してアジアの平和、ないし世界の平和を維持し、アジア民衆の福祉増進に努めることは両国の責任であり、人類への義務であると痛感いたします。日本は過去２千年、常に中国の文化に助けられ、中国人民に尊敬と親愛の念を抱いてきました。最近にいたって、不幸な事態を発生し、中国の

人民に一方ならぬ損害をかけましたことは、日本国民も深く遺憾としておるところでありますから、何卒きびしく咎めないように願います。今後私といたしましては、両国民が真に兄弟の感情をもって暖かき交友を続けたいと願っております。今回の私の貴国訪問はただ一にこの願いを実現したいためであります」

歴史を振り返り、相手を立てて尊重しながら両国の交流、提携がアジアと世界の平和の責任、義務であるとする格調高い内容であり、日中関係が困難な現在、是非、日中双方の指導者に参考にして頂きたいスピーチです。

そして、石橋・周会談が何回か行われ、共同声明の起草作業は難航しましたが、9月20日、「石橋・周共同声明」（コミュニケ）がまとまりました。コミュニケは、「平和共存5原則とバンドン会議10原則に基づいて、日中両国民の友好促進に努力し…（略）また1日も早く正常な関係に回復するよう努力すべきである」と述べ、日本の中国敵視政策の是正、政治・経済・文化の交流促進と政経不可分の原則などを確認しました。これらは、大正デモクラシー期以来、湛山が主張し続けてきたものの集大成であると同時に、1972年の日中共同声明の基にもなりました。

1963年、日本工業展覧会総裁として、2度目の訪中をした湛山は、周恩来と再び会談、湛山が提唱していた日中米ソ平和同盟構想でも意見の一致をみました。同構想は、湛山が1961年に呼びかけたもので、懸案となっていた、日中、日ソの平和条約を進めるためにも、日米安保条約を中ソにまで拡大し、日中米ソ4国の相互安全保障条約へ発展させようとしたものです。残念ながら、構想段階で終わってしまいましたが。

石橋・周会談（1961年9月）

日中国交回復が実現したのは、湛山の晩年（88歳）、自宅で療養中の時でした。1972年9月22日、訪中を前に田中角栄首相が新宿区中落合の石橋湛山宅を訪問、車イスで迎えた元首相から周恩来首相あての「日中正常化を喜ぶ」という手紙が託されました（『朝日新聞』同年9月26日「忘れてならぬ先駆者たち」）。

9月29日、日中共同声明発表、宿願の達成に満足した湛山は、「日中国交回復にあたって」を発表してこの慶事を祝しました。

「私は、自民党総裁に選ばれ首相の地位についたとき、日中の国交正常化に取り組む肚をかためた。不幸、病のため職を辞するのやむなきに至ったが、十数年たった今日、ようやく私の念願が実現した。私は、大正の初期から、もし日本が口先だけでなく、真に日中両国の親善をこい願うならば、中国の国民を尊敬し、満蒙の領土のみならず、その他一切の特殊権益を放棄しなければならぬと提唱し続けてきた。私にとっては、60有余年の宿願が達成されたわけである。大なる喜びとともに、深い感慨を禁じ得ない。…」（『東洋経済新報』1972年10月14日号

巻頭言）

大正初期以来、日中友好・植民地放棄論を主張し続けてきた湛山ならではの言と言えるかと思います。また、中国でも『人民日報』は、「井戸を掘る人」として、湛山の中日関係正常化への功績を讃えました。

日中関係正常化を見届けた湛山は、その後病状が悪化し、翌１９７３年４月25日、中落合の自宅で静かに息を引き取りました。88年７か月の生涯でした。そして、４月27日、周恩来首相より、「中日両国の人民は石橋先生の功績を永遠に銘記するでしょう」という弔電が自宅に届けられました。

湛山の中国論の特長、そして

以上、大正の初期から昭和の40年代までの、半世紀を超す湛山の言論活動、政治活動を通して、湛山の中国認識・中国論をたどってみました。その、根底にあるのは、民族自決（主権）の尊重、内政不干渉、平等互恵、平和共存の思想であり、それは、徹底したリベラリズム、合理主義、平和主義の考えに貫かれており、今日でも十分に通用するものです。また、その先見の明、一貫性は、驚嘆に値すると言えます。今日の日中関係の危機打開のために、もっともっと学ばれ、参考にされるべき言論人、政治家と言えるかと思います。

近現代日本を代表する言論人、思想家として挙げられるのは、福沢諭吉、中江兆民、吉野作造の３人かと思います。『学問のすすめ』『文明論の概略』などを著した福沢諭吉は、確かに近代日本を代表する思想家ではありますが、「脱亜論」に示される、アジア侵略を肯定する思想も含めて考えると、戦前はともかく、21世紀の今日のアジアや世界では、日本を代表する思想家として、堂々と主張できるものではなくなっています。

ほぼ同時期に活躍して福沢と対比され、「東洋のルソー」とも呼ばれている中江兆民は、自由民権運動の理論的指導者、思想家として著名ですが、政治活動の一貫性という点では、課題も指摘されています。

民本主義を唱え、大正デモクラシーの旗手として活躍した吉野作造は、大正期を代表する学者・言論人として、評価は高いのですが、同時期の湛山との比較では、主権論を棚上げしたり、初期には対華21か条要求を支持するなど、国民主権、帝国主義に対する認識の不十分さも指摘されています。

こうした３人と比較すると、民権、民族自決、平和、自由主義を一貫して貫いたこと、しかも、半世紀を超える活動期間の長さ等の点で、石橋湛山は、福沢諭吉、中江兆民、吉野作造をしのぐ言論人・思想家であり、「偉大な言論人」と言ってもいいのではないでしょうか。

（２０１３年11月22日・フォーラム）

〈参考文献〉

『石橋湛山全集　全16巻』（東洋経済新報社）『石橋湛山評論集』（岩波文庫）
増田　弘『侮らず、干渉せず、平伏さず―石橋湛山の対中国外交論―』（草思社）
浅川　保『偉大な言論人 石橋湛山』（山梨日日新聞社）

講師略歴（あさかわ　たもつ）
１９４５年　福島県生まれ
１９６９年　東京大学文学部日本史学科卒業　以後、山梨県内の各高校教諭を歴任
２００７年～　山梨平和ミュージアム理事長
著書『偉大な言論人　石橋湛山』など

特集「日中関係の井戸を掘った人々」第４回

たたき上げの商売人・高碕達之助

朝日新聞記者　牧村健一郎

私が高碕達之助という人物に興味を持ったのは、４、５年前、勤務している朝日新聞社で、昭和の新聞報道、とくに朝日の報道を、自分たちの手で見直そうという企画「検証　昭和報道」というチームに入ったのがきっかけでした。

あまり知られていない、あるいは知られていても中身がよくわからない事柄を取り上げようと、戦前・戦中は「大東亜会議」（東京、１９４３年）を、戦後は「アジア・アフリカ会議（バンドン会議）」（インドネシア・バンドン、１９５５年）を調べ、新聞に連載しました。バンドン会議については、現地まで行って取材しました。そのバンドン会議の日本政府首席代表が、高碕だったのです。

この会議で高碕は外務省の筋書きを超えて活躍し、中国の周恩来首相、インドのネルー首相、エジプトのナセル首相らアジア・アフリカの新しいリーダーと親交を結び、戦後日本のアジア外交の扉を開きました。とくに、周恩来との出会いは、のちに日中ＬＴ貿易（半官半民の日中間の長期貿易協定、１９６２年）に結びつき、１９７２年の日中国交回復へ至ります。日中の「井戸を掘った人」の一人として、よく知られます。バンドンで高碕・周の通訳をした元外交官がまだご存命で、話が聞けたのが、たいへんラッキーでした。

調べていくうち、高碕は日中の橋渡し役としてだけでなく、昭和史のさまざまな局面で活躍し、人となりも破格・破天荒、実に魅力的な人物とわかりました。

最近、知る人も少なくなったので、あらためて生涯を調べ直し、評伝（『日中をひらいた男　高碕達之助』朝日新聞出版）を書くことになったのです。

■プロフィール

高碕は１８８５年（明治18年）現在の大阪高槻市柱本、淀川べりの豊かな農家で生まれました。府立４中（現茨木高校、のちに川端康成、大宅壮一が卒業）を経て、東京・越中島の農商務省水産講習所（のちの東京水産大学、現在は東京海洋大学）に学びます。

日露戦争の時期でした。日本の勝利後、ポーツマス条約が結ばれますが、これに反発した民衆の日比谷公園焼き打ち暴動

が知られています。政府は、日本の国力が尽きていたため、講和を結んだのですが、実情を知らされていなかった国民が暴発した事件でした。若き高碕も、この暴動に参加し、ポリスボックスを破壊して、警察に捕まる経験もしています。後年の高碕では考えられない行動ですが、あの当時は日本全体が大興奮状態だったのでしょう。高碕は晩年、日米安保条約反対のデモに接し、若かりしころの日比谷暴動を思い出しています。

卒業後、三重県の水産会社を経て、単身アメリカに渡り、メキシコの水産会社で技師として働き、カリフォルニア半島の孤島に暮らします。ちょうど日本移民排斥の時期で、高碕も日本海軍のスパイと疑われますが、旧知のスタンフォード大学学長に助けられ、窮地を脱します。そのおり、学長からの紹介で若い鉱山技師と知り合います。ハーバート・フーバーというその若者は、その後政界に進出、大統領にまで大出世します。高碕は親交を結び、ホワイトハウスに彼を訪ねています。高碕の対米人脈のキーマンです。

帰国後、大阪で製缶会社の東洋製罐を創業（１９１５年）、みるみる業績を伸ばし、関西財界の若手ホープと目されます。昭和に入り、彼に目を付けたのが、新興財閥の主、鮎川義介で、日産グループを満州に移して満州重工業（満業）を起こした鮎川は、高碕を口説いて満業の副総裁に就かせ（のちに総裁）、高碕は満州の首都、新京（現長春）に住みます。

敗戦（１９４５年８月）は新京で迎えます。ソ連軍が満州を侵攻、極度に治安は悪化し、日本人社会は不安を募らせる中、高碕は日本人会の会長に推され、在満州日本人の最高指導者の役割を担います。関東軍や満州国政府首脳は逮捕、連行されたため、民間人が矢面に立たざるを得なかったのです。高碕はソ連軍司令官に対し、治安維持、生命財産の保証など、敗者側の責任者として交渉します。ソ連、中華民国軍、共産党軍と占領軍は次々に変わり、そのつど、高碕は混乱を避け、治安をまもるため、占領軍に協力を約束、そのため新たな支配者から逮捕・拘留の危機に瀕しますが、高碕なくして満州の重工業復活が不可能と知ると、占領軍はむしろ利用しようと手を出しません。１００万を超す満州からの日本人引き揚げ事業の日本側総責任者も高碕でした。

１９４７年11月にその年の最後の引き揚げ船で佐世保に帰国します。私は昨年、引き揚げ地の佐世保・浦頭（うらがしら）港に行ってみました。小さな港の一角に、引き揚げ記念の碑が立ち、丘の上に記念館があり、当時の服やリュック、ＤＤＴを頭から浴びせられる引き揚げ者の写真などが展示されていました。港からしばらくのぼったところに、当時、厚生省援護局の建物群があり、高碕はじめ引き揚げ者はここで検疫や故郷に帰る準備のため数日を過ごし、近くの国鉄・南風崎（はえのさき）駅から列車で帰郷したのでした。

私がここでもっとも驚いたのは、この援護局の建物があったところ、命からがら引き揚げてきた人たちが日本の第一歩

南風崎駅

を踏んだその地がいま、テーマパークとして知られるハウステンボスに生まれ変わっていたことでした。このあたりは引き揚げ事業が終わると長年、荒れ地でしたが、昭和の末、中世オランダの街並みを再現するしゃれた建物が次々に建てられ、ハウステンボスとして、大観光地に変貌したのです。かつて引き揚げ者が乗り込んだ南風崎駅のホームからは、すぐ向こうにハウステンボスのホテルが見えます。隣駅のハウステンボス駅（ハウステンボスができて新設された）に立ち寄ると、待合室でガイドブックを手にした中国人の若い観光客らが談笑していました。時代の変化を感じさせる光景でした。

さて、帰国した高碕は、しばらく本職の製缶事業を経営していましたが、国策会社の電源開発会社の総裁に就任、アメリカの近代的な土木技術を導入して巨大な水力発電ダム・佐久間ダム（静岡・愛知両県境）の建設を推進、事業家としての手腕をみせます。戦後の電力不足の切り札として期待されたダムでした。

長年続いた吉田内閣を倒した鳩山一郎首相に、経済審議庁（のちの経済企画庁）長官になるよう言われたのは１９５４年12月でした。翌年１月の総選挙に出馬、当選、70歳の新人代議士です。４月、バンドン会議に日本政府代表として出席します。

その後、岸内閣の通産大臣を経て、60年春に訪ソし、フルシチョフと北洋安全操業を交渉し、秋には訪中して周恩来首相と再会、旧満州を視察旅行します。フルシチョフと周にサシで会える日本人は高碕くらいだったでしょう。

この間、元電発総裁として、岐阜県荘川村の御母衣ダム湖に沈むはずだった老桜を高台に移植し、生まれ代わらせます。桜ファンによく知られる「荘川桜」です。

62年、北京でＬＴ貿易協定に調印します。Ｌは中国側の責任者・廖承志の頭文字、Ｔはもちろん高碕のＴです。翌年、北海道・根室半島沖の貝殻島周辺で、日本の零細漁民がコンブ漁を安全にできるようにする協定がソ連と結ばれます。長年、高碕が交渉してきた「貝殻島の安全操業問題」がようやく解決したのです。

私は現地を見るために、昨春、根室・納沙布を訪れました。半島突端の納沙布岬灯台のすぐ近くに、高さ５㍍もあろうかという高碕の顕彰碑が立っていました。地元の漁民が安全操業を可能にした高碕への恩を忘れないようにと、建てた碑です。地元漁協の専務に会いました。毎年６月、今でも、コンブ漁が解禁になる日の前日、漁民に許可証を渡すセレモニーを、高碕の大きな肖像写真を飾った漁協の講堂でするそうです。数年前までは毎年、灯台わきの高碕顕彰碑の前で、セレモニーをしていましたが、強風が吹き、寒いので、現在は漁協講堂で行っています。ここでは高碕は決して過去の人ではない、と強く感じました。

根室・納沙布岬灯台わきの高碕顕彰碑

高碕が胃がんで亡くなったのは64年２月です。79歳でした。この年の秋、東京オリンピックが開かれています。そう考えると、さほど昔の人でもない、という気もします。

■幅広い活動域

高碕は日本近代史そのものを歩んできた男、とくに昭和史に大きな足跡を残した人物でした。忘れ去られるのは惜しいと思います。

彼の業績を挙げるとすれば、第1に、62年11月にLT貿易の協定をまとめたことでしょう。中華民国（台湾）を承認していた当時の日本にあって、巨大な中国大陸の重要性を認識し、台湾ロビー、右翼からの妨害、嫌がらせを押し切って、半官半民という事実上の政府お墨付きで貿易の窓口を開いた高碕の先見性は高く評価されてしかるべきでしょう。なにしろ大陸は、原料輸入と工業製品の輸出の場として、日本にとってなくてはならない、最大の隣国なのですから。

62年秋は世界が震撼した時期でした。キューバ危機が起こり、核戦争が現実味を帯びました。中国とインドの間で紛争が勃発し、バンドン会議の理想主義が吹き飛びました。バンドンの2大ヒーロー、周とネルーが角突き合わせたのです。周は刻々と変わる世界情勢を分析し、判断しつつ、高碕と会談し、高碕も世界を見ながら日中交流を進めたのでした。

その後、文革などの影響で日中関係が悪化した時期は、このLT貿易と、その後継としての覚書貿易協定が日中を結ぶ唯一のラインとして機能し、72年の国交回復につなげました。

2番目は、納沙布岬沖・貝殻島のコンブ漁安全操業を実現させたことでしょう。日ソ間最大の懸案である北方領土問題と直接からむため、きわめて難しい問題でした。さきほど述べたように、現地には高碕の顕彰碑があり、いまも尊敬されています。

もともと高碕は、水産講習所出身の罐詰屋ですから、北洋の漁業にはいろいろな関係がありましたが、コンブ漁には縁が薄かったようです。大日本水産会会長として現地を視察し、零細漁民の苦渋を知り、初めてなんとしてでも安全操業をまとめなければと誓ったといいます。一家の担い手である父や息子が、ソ連船に拿捕され、半年も1年も帰ってこない事態は、満州からの引き揚げ体験者である高碕にとって、他人事ではなかったのです。

ソ連の駐日大使を自宅に呼んで、零細漁民の苦しみを訴えました。さらにはフルシチョフ、ミコヤンら首脳にも会える立場でしたので、トップにも善処を要望しました。ただこの問題は、領土問題が絡みます。貝殻島は納沙布岬のすぐ先ですが、ソ連が実効支配し、日本が固有の領土とする北方4島に属し、この島に近づくと、ソ連の警備艇が拿捕にくるのです。原則論を唱える外務省としては、タッチしてほしくない問題で、高碕は日本の外務省ともすりあわせが必要でした。「魚と領土を交換するな」「売国奴」などと右翼が自宅におしかけ、無言電話などの嫌がらせが続きました。

結局、領土問題には触れず、政府とは違う立場の大日本水産会が漁業者に許可証を出し、ソ連側に入漁料を払うかたちでまとまりました。ソ連はコンブを利用しないので、コンブを採取されても痛くもかゆくもないのですが、むこうも、原則論でつっぱってきます。ソ連からすれば、入漁料を取ることは、間接的に領土として認めさせたという理屈になるのでしょう。高碕は両方の顔をたてつつ、困難な交渉をまとめ上げ、零細漁業者のために実際的な解決をもたらしたのです。実務家の高碕ならではの業績でした。

3番目としては、敗戦後の満州で、在留日本人の指導者として治安維持や引き揚げ事業をまとめたことでしょう。次々にかわる占領軍に協力したことで、一部

の日本人から「裏切者」などと批判されただけでなく、新たな支配者からは、旧支配者の協力者として「銃殺」の危機もありました。

ダム湖に沈むはずだった桜を移植した「荘川桜」の保存も、忘れられない業績です。財界・経済人の高碕は、あくまで利益追求の実務家でしたが、苦労人だけあって人情の機微に通じ、決して「世の中、カネがすべて」とは思っていませんでした。

ダム建設で消滅する集落の記憶を刻む桜の移植、保存は、「地元対策」を超えて地域の人々の心に訴えました。ちょうど、東日本大震災で唯一残った、気仙沼の「奇跡の一本松」と同じです。荘川の人たちは高碕死後も、一周忌、三周忌、七周忌と現地で法事を続け、高碕を慕いました。

昨年秋、この「荘川桜」を見てきました。高山から車で1時間ほど、御母衣ダム湖のほとりに、樹齢500年といわれる2本の老桜があります。数日前の台風でかなり枝折れしていましたが、枝には緑の葉がダム湖を渡る風に揺れ、まだ立派に生きていました。

高碕・周恩来会談

移植の物語は映画にもなり、「荘川桜」は毎年、5月の連休ころに咲くので、そのころは多くの観光客が訪れます。近くの白川郷がユネスコの世界遺産に指定されてからは、そのついでに寄る人も多いそうです。高碕の名は、今では、「荘川桜」の保存で最も知られているかもしれません。

■たたき上げの商売人

高碕はたたき上げの商売人でした。学歴や学閥とは無縁であり、国家・政府の後ろ盾がない、自前の人間であり、独歩の大阪商人でした。だからでしょう、日本人に珍しく、修羅場に強いのです。決められたレールを走る秀才官僚、マニュアルに忠実な優等生とは違う、臨機応変の度胸がありました。敗戦後の満州で、敗者としてソ連軍と交渉した際の堂々とした態度は、打ちひしがれた在満州の同胞にとって、頼もしかったといいます。

商売人ですからイデオロギーや理念とは無縁です。中国との関係改善でも、たがいにウインウインの関係になることを目指しました。むろん、戦中戦前の日本の大陸政策、中国侵略を反省し、とくに満業総裁として満州開発の先頭に立った事実もあり、しばしば謝罪の意を表明していますが、根本のところは、ギブアンドテイクでいこう、ということだったと思います。同文同種意識、アジア主義的な思想も希薄でした。

高碕の異母弟にあたる方と、数年前、大阪・高槻でお会いしました。90歳を越してもお元気で、写真で見る高碕とそっくりのお顔でした。その方が言うには、兄である高碕は「太いもうけをする商売人や」ということでした。目先のことより、将来の大きい商売を見据える人物ということでしょう。日中のLT貿易はまさに、そうした大局観から生まれた業績でした。

そういえば、バンドン会議でも、こんなことがありました。

会議の合間に、アジア・アフリカの若い指導者に日本製の精巧なカメラや時計をプレゼントしておおいに喜ばれたとい

うのです。アジアはともかく、アフリカ諸国の政治家にとって、極東の日本ははるかに遠い国です。しかも戦争に負けてまだ10年です。その極東の小さな島国が、こんな素晴らしい工業製品を生産するまでに復興した、と驚いたに違いなく、日本への認識を変えたのです。大使を交換したいという申し出が続いたといいます。まずエサをまき、後でおおきく回収する。高碕ならではの作戦でしょう。

複眼的視野も、高碕の大きな特徴でした。

高碕はＬＴ貿易やソ連との漁業交渉で知られ、アジア外交家とみられがちですが、実はアメリカとの関係の方がはるかに長く、深いのです。アメリカ通ということが、対中国、対ソ連との交渉で大きな武器になっています。当時の日本の政治家、経済人はおおむねドメスティックでしたが、その点、高碕は20代から国際人でした。

アメリカには大物キーマンがいました。戦前については先にもお話ししたフーバー大統領であり、戦後は、民主党院内総務を務め、のちに下院議長になったマコーミック議員です。

満州から帰国して製缶業に復帰してしばらくした１９５０年ころ、高碕は罐詰の関税の問題で渡米、民主党の有力議員マコーミックに面会します。率直に日本の窮状を訴えると、マコーミックは「ドント　ワリー　タカサキ」と胸をたたき、日本製罐詰に高い関税をかける法案を審議未了にしてくれました。これをきっかけに、二人は親しくなります。

民主党の若いケネディ上院議員が大統領に選ばれ、１９６１年、ワシントンで就任式がありました。あの有名な「自分たちのために国が何かしてくれることを望まず、自分たちは国に何ができるかを考えていただきたい」という演説があったときです。高碕はマコーミックに招かれ、就任式に出席します。一緒に連れて行ったのが、若手のホープ・中曽根康弘議員でした。

私は数年前、中曽根さんにお目にかかり、高碕の思い出を語ってもらいました。中曽根さんは高碕を政治の師として、尊敬しています。訪米の飛行機の中で、高碕はこう言ったといいます。「俺たちは東洋の道徳で行こう。中国ではアメリカの悪口は言わない、アメリカでは中国を悪く言わない」と。以前、北京で社会党の浅沼稲次郎書記長（当時）が「アメリカ帝国主義は日中両国共通の敵」と発言したのを、踏まえていたのです。相手に迎合しないぞ、ということでしょう。

中曽根さんによると、高碕はワシントンのホテルで、周恩来にあてて、リンカーンか何かの絵葉書を出したといいます。「アメリカも中国も呑んでいると驚いたよ」と語ってくれました。「首脳外交は人間のスケールがものをいう。相手もプロだから、そこを見る。首相として各国首脳と会談したが、高碕さんの姿勢、風格を受け継ぐという意識だった」と中曽根さんは言っていました。なお、私は『日中をひらいた男』を刊行すると、すぐに中曽根さんにお送りしましたが、直後に本人から、ありがたく受け取った、読みます、というお便りをいただきました。高碕への敬愛の気持ちは格別なのだ、と感じました。

アメリカでは、連邦議会の食堂で有力議員を集めて中国問題を話し合っています。マコーミックの差配です。当時アメリカは共産中国への猜疑心が強く、情報も限られていました。高碕から最新の中国情報を知りたかったでしょうし、一方、高碕は地政学的に日本は中国大陸ぬきにはやってはいけないのだ、として、政経分離のかたちで中国と貿易・経済交流を進めることに理解を求めたのでした。日本の政治家はともすると、密室での会談

や、あうんの呼吸で物事を進めますが、高碕のスタイルはオープンで、堂々としています。また、中国に関する米有力議員の意向、空気を知ったことは、周との会談でものをいったはずです。周もアメリカの最新の情報、空気を知りたかったのです。

もう一つの複眼的視野は、彼が経済人であり、生きた経済を知っていることでした。外交交渉でも、経済がからむと話が明瞭になります。妥協が生まれます。中国とのＬＴ貿易交渉がうまくいったのは、政治は松村謙三、経済は高碕と役割分担したからでしょう。松村は重厚な人格者で、アジア主義的な風格があり、周からも信頼されていましたが、まったくの経済オンチでした。むしろ経済、商売を軽く見ていたキライがあります。その点、高碕は商売人です。度胸があるだけでなく、経済を動かす勘どころも、こころ得ています。

実は中国は62年のあの時期、大躍進政策の失敗と3年続きの悪天候で、農村が崩壊状態になり、２０００万とも３０００万ともいわれる飢餓者を出す、危機的な時期でした。驚くべき数字です。ですから、日本からの肥料や人工繊維（ビニロン）の輸入は喫緊の課題でした。周はなんとしても日本との貿易をまとめる必要がありました。経済に明るい高碕は、周にとっても都合のいい交渉相手だったのです。

大器晩成という言葉がありますが、高碕は年をとればとるほど、大きな仕事をしています。50代の成功した罐詰屋さんだった高碕が、鮎川の要請で国策会社の満州重工業の経営を任されたのが最初の大きなステップでした。60歳のとき満州で敗戦を迎え、電源開発総裁を経て大臣になったのが70歳、先ほども述べたようにその年で1年生代議士になります。そこから、日ソ、日中、日米、さらにはアラブとの交流の先鞭をつけます。70代半ばになって、モスクワや北京やカイロに出かけるのは、骨だったでしょうが、ますます若く、元気になった、と周囲は見ていました。70代にもなって現役バリバリ、先頭にたつということは、「老害」とも言われかねませんが、高碕はほかに誰もできない成果を出しているのですから、文句のつけようはありません。

あまり知られていませんが、戦後日本の対アラブ外交の扉を開いたのも高碕でした。

バンドン会議では、周らアジア・アフリカの指導者と語り合っていますが、もっともウマが合ったのは、エジプトのナセル首相でした。ナセルはまだ30代後半、年齢は親子ほど違いますが、意気投合したのです。

高碕によると、会議の始まる前日、ホスト役のインドネシアのサストロアミジョヨ大統領に対し、この会議は初めてアジア・アフリカの首脳が一堂に集まる世界的な会議なのだから、意見の違いよりも合意を重んじるべきであり、そのためには決議は多数決ではなく、満場一致方式でやろう、と高碕が提唱したといいます。アメリカと安保条約を結んでいる日本としては、共産中国や中立国の提案する政治的な決議には賛成できず、そうなると、日本は孤立する。それを回避するために提案したのです。次回のアジア・アフリカ会議をカイロで開く意思を持ち、分裂を恐れるナセルは、すぐに高碕案に賛成します。以降、二人は会議中、食事を共にするなど、親交を深めました。

帰国後の通産大臣時代、高碕は日本アラブ協会の結成に協力しました。この組織は、ほとんど交流がなかった日本とアラブの窓口になり、のちに石油危機の時もパイプ役として大きな役割を担いました。

若手代議士の中曽根氏が中近東訪問の

際は、ナセル宛の高碕の紹介状を携えています。高碕もエジプトを2度訪問し、ナセルと旧交をあたためています。テーマは主に経済協力で、アスワンハイダムの建設も話し合われましたが、残念ながら借款条件で折り合えず、この大プロジェクトはソ連の手で行われました。これをきっかけに、ナセルは急速にソ連に傾斜していくのです。

高碕の生涯最後の海外訪問は、エジプトでした。ナセルとも会い、スエズ運河の工事をしている日本の建設会社の現場まで視察しています。亡くなる1年3か月前のことでした。

並外れた動物好き、というのも、高碕の大きな魅力でした。桁外れといっていい動物愛好家でした。とくに、あの獰猛なワニを深く愛して、自宅で飼っていたというから、びっくりします。訪れた客にワニを見せて驚かすのが、高碕の悪い趣味でした。

若いころ、カリフォルニア半島の孤島で、ワニなど野生の動物と親しんだのが、きっかけです。小ワニをよく連れて歩いたそうで、国境の税関では「好ましからざる動物」としてワニの携帯を拒否されたといいます。帰国してからも関西の自宅で飼っており、宝塚にあった動物園に大量に寄付しました。先ほどふれた弟さんは、一時、高碕一家と同居していたとき、よく、ワニのエサにするために近くの田んぼにカエルやヘビを取りにいかされたそうです。

ですから、ワニの飼育では日本の草分けです。九州・別府温泉の鬼山地獄にいるワニたちは、どうやら高碕の飼っていたワニと関係があるようです。伊豆・熱川のバナナワニ園のワニは輸入ものですが、高碕はしばしば訪ねてきて、ずかずか飼育室に入り、小ワニのしっぽをぶらさげて喜んでいました。

東京動物園協会の会長を死ぬまで務め、皇居のお堀に浮かぶハクチョウは、高碕の発案で生まれました。皇居前を魅力的にしよう、と宮内庁や丸の内の大企業に呼びかけ、ドイツ・ハンブルクのハーゲンベック動物園からハクチョウを輸入し、お堀に放したのが、動物園協会会長の高碕でした。いまも優雅に泳ぐハクチョウは、その子孫です。

こんな話もあります。

バンドン会議でインドネシアに行った折、会議の合間を縫って動物園に行き、オランウータンと出会いました。ぜひ日本にくれ、と交渉した結果、その年の暮れ、若い雌のオランウータンがスカルノ大統領の好意で送られてきました。のちにモリーと呼ばれるこのオランウータンは、クレヨンを持たせると絵を描くため「モリー画伯」として子どもたちに人気ものでした。上野動物園から多摩動物園に移ったモリーは、2011年3月の東日本大震災を機に食べ物を受け付けなくなり、地震の2か月後、59歳で絶命しました。飼育されたオランウータンとしては世界で最高齢だったそうです。

今、日中間は国交回復後で最悪と言われます。高碕や周のような、大局的観を持った人物が、いないのが残念です。こうした時期だからこそ、高碕の事跡を振り返る意味は小さくないと思います。

（2月14日・フォーラム）

講師略歴（まきむら　けんいちろう）

1951年　神奈川県生まれ
早稲田大学卒業、朝日新聞入社　校閲部、学芸部、AERA編集部などを経て現在 be編集部
著書　『獅子文六の二つの昭和』『日中をひらいた男―高碕達之助』など